

# 園長のまなざし

## 第5回

### 手をつなぐことから

柘田正子

「あ、園長先生、Bちゃんどこにいるか知らない？」  
園長室を出たところで、A子が私に声をかけた。

「ごめんなさい。私、今までお部屋でお仕事していたから、わからないわ」

「そうか。……じゃ、一緒に探そ」A子は、気持ちを新たにするようにそう言って、私と手をつないだ。

「そうね。一緒に探しましょう」A子のほうからつないでくれた手の感触がうれしくて、私も指の先まで気持ちを込めて、手をつなぎ返した。

私は子どもと手をつなぐことが好きで、よく自分からそのようにするのだが、自然につなぐ手と手の関係は、心地よくて温かい。そしてこの心地よさは、自分の幼稚園時代の原体験につながっていく。多くを覚えてはいない幼稚園の日々ではあるが、やや暗めの園の廊下で先生と手をつないでいたときのことはよく覚えていて、そのとき、私はまったく安心した気持ちで心



地よかった。今、私が子どもたちと手をつなぐことを好むのは、この感覚が私の中に今も息づいているからだろうか。A子の『今』は、後の日まで残っているのだろうか。

幼稚園の環境が、在園のすべての子どもにとってはもちろんのこと、共に生活を創っている保育者たちにとっても、それぞれにふさわしく温かく心地よいものであるようにと願う。単なる平穩の温かさではなく、心や体が自由に動いてかわり合うところに新しい状況が生まれ、一人ひとりが新しい自分に変わっていく育みの温床の心地よさ、温かさを期待するのである。

園庭が見渡せるテラスまで来たとき、A子はふっとつないだ手をほだき、「わたし、お庭で遊んでくる。園長先生、Bちゃんに会ったらそう言っといて」と言って走り去った。さつきとはまた違う、新しいA子の後姿であった。

(東京都 駒場幼稚園)